平成24年11月23日（金）　午前10時から

磐城山遺跡（第5次）発掘調査　現地説明会資料

はじめに

1	事業主体	個人
2	調査原因	農地改良工事
3	調査目的	埋蔵文化財の記録保存
4	所 在 地	鈴鹿市木田町2261，2262－1，2263の一部
5	調査期間	平成24年6月25日から現在進行中
6	調査面積	約600㎡（資料1）
7	調査主体	鈴鹿市　文化振興部　考古博物館　埋蔵文化財G
8	発掘成果	竪穴住居36棟以上を中心に，溝，柱穴，土坑など多数検出された。 市内でも随一の密度の濃さで，各竪穴住居が著しく重複している。 〈検出遺構〉　弥生時代後期～古墳時代初頭の竪穴住居（12棟以上） 古墳時代中～後期の竪穴住居（14棟以上） 時期不明・検討中の竪穴住居（10棟以上） 〈出土遺物〉　コンテナケースに30箱 弥生土器，土師器，須恵器，石器（砥石・石製模造品） ※　平成24年11月5日現在の数値です

1　調査に当たって確認すべき事項として考えたこと

① 竪穴住居がどこまで続いているのか

これまでの発掘調査の成果から，第5次調査区にも弥生時代や古墳時代の竪穴住居が多数重なり合ってあることは容易に想像できました。磐城山遺跡の範囲が丘陵上のどこまで広がっているのかを確認すること。

② 第1次調査で見つかっていた環濠の続きが確認できるか否か

環濠とは，集落の周囲を囲い込む大きな溝のことを言います。東海地方では弥生時代後期の終わりくらいによく確認されています。大きいものは全体の直径が400~500mに達するものもあります。磐城山遺跡と同じ頃の環濠としては，河田町の南山遺跡や上野町～石薬師町の一反通遺跡，稲生町の南谷遺跡，岸岡町の天王遺

跡などで確認されています。

第 5 次調査区は磐城山遺跡の北の端に当たり，さらに北側は急激な斜面となって谷へ続いています。もし，環濠が集落をぐるっと囲い込むものなら，北側で環濠の続きが出てくるはずでした。

2　実際に確認された遺構と遺物

① 竪穴住居の様子

竪穴住居は北端のめいっぱいまでびっしり続いていました。

磐城山遺跡の竪穴住居には弥生時代と古墳時代の 2 種類があります。古墳時代の竪穴住居の下に弥生時代の竪穴住居があることが多く，そのためより複雑にしているのですが，第 5 次調査区での北側の範囲では弥生時代の竪穴住居はほとんどなく，古墳時代のものがほとんどだという特徴がありました。

② 環濠について

第 5 次調査区では，環濠は見つかりませんでした。

調査区の直ぐ北側は急激に傾斜しており，第 1 次調査区の溝が続いていなかったと考えられます。先に紹介した遺跡の環濠も集落全体を囲い込む可能性があるものは一反通遺跡や天王遺跡の例程度で，一般的にいわれる環濠とは少し様子が異なります。

磐城山遺跡やその他の例は，環濠とされる溝の形状や位置に加え周囲の地形とをあわせて考えますと，丘陵の先端を分断するようにカットしていたものだと考えられます。その目的は集落全体の排水機能や区割り等が考えられるのではないでしょうか。

3　今の時点で考えられる磐城山遺跡の全体像（資料 2）

磐城山遺跡では旧石器時代のナイフ形石器から中世まで幅広い遺構・遺物が確認されています。

これまでの所，本格的に遺跡が営まれるのは，弥生時代後期になってからです。集落跡として 100～200 年間程度の幅があったものと考えられますが，その集落も弥生時代の終わりと同時に一時断然するようです。その後，200～300 年位間を置いて古墳時代後期頃になると，再度大規模な集落跡として機能しはじめます。さらに，これまでの 3～5 次調査区ではあまり顕著ではありませんが，遺跡の西側に行くにつれて，7 世紀頃の古代の遺構や遺物が見られるようになり，古墳時代から概ね継続して遺跡が営まれているようです。

5 次調査まででは，その後の奈良時代や平安時代の遺構・遺物は少なく再び衰退していくことも想像できます。ただし，西側の木田坂上遺跡では奈良時代の竪穴住居

が見られる等，西へ行くほど新しい時期のものが見られるようになるので，今後の調査の進展によって古代の様子は変わってくるものと思います。

ただ，調査が進んでも古代末から中世前半の時期は少ないのではないでしょうか。再度磐城山遺跡に痕跡が見られるのは中世後半の室町時代から戦国時代にかけての頃となります。おそらく，西に隣接する木田城跡と一連のもので，戦のための砦として作られたのでしょう。遺跡の中に大きな溝で屋敷地等を区画しており，その溝は現代の地境として踏襲されています。

4　磐城山遺跡のこれから

弥生時代・古墳時代の集落跡がどこまで広がっているのは不明ですので，今後継続して解明していかなくてはいけません。磐城山遺跡の所在する高岡丘陵上は弥生時代の集落跡・墓域等が続いており，これらとの関係を明らかにすることも求められます。また，古墳時代の集落は，国分寺造営の影の支援者と考えられる古代豪族の大鹿氏に関係する集落であるので，その点の検証も必要とされるでしょう。

さらに，木田町は古代の河曲郡駅家郷に所在すると考えられる。河曲郡には古代駅伝制の河曲駅や，壬申の乱の際に大海人皇子が立ち寄ったとされる「河曲の坂下」があった地域です。直ぐ北側には国分二寺もあり，当然，東海道も近隣を通っていたことが予測されます。今後の調査が進むと，これらの古代の伝記の内容等に，具体的に迫ることができるようになるかもしれません。

写真１　竪穴住居 33･34 の掘削風景（北東から）

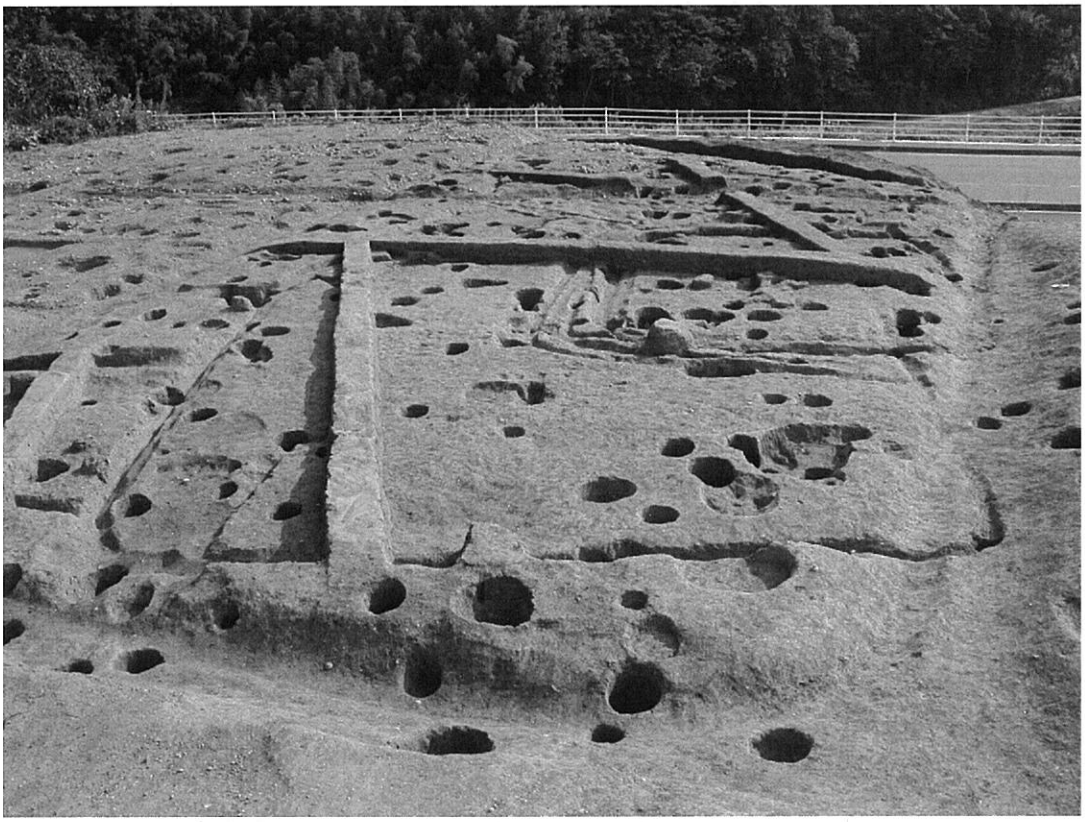


写真２　竪穴住居 45 等の完掘（西から）

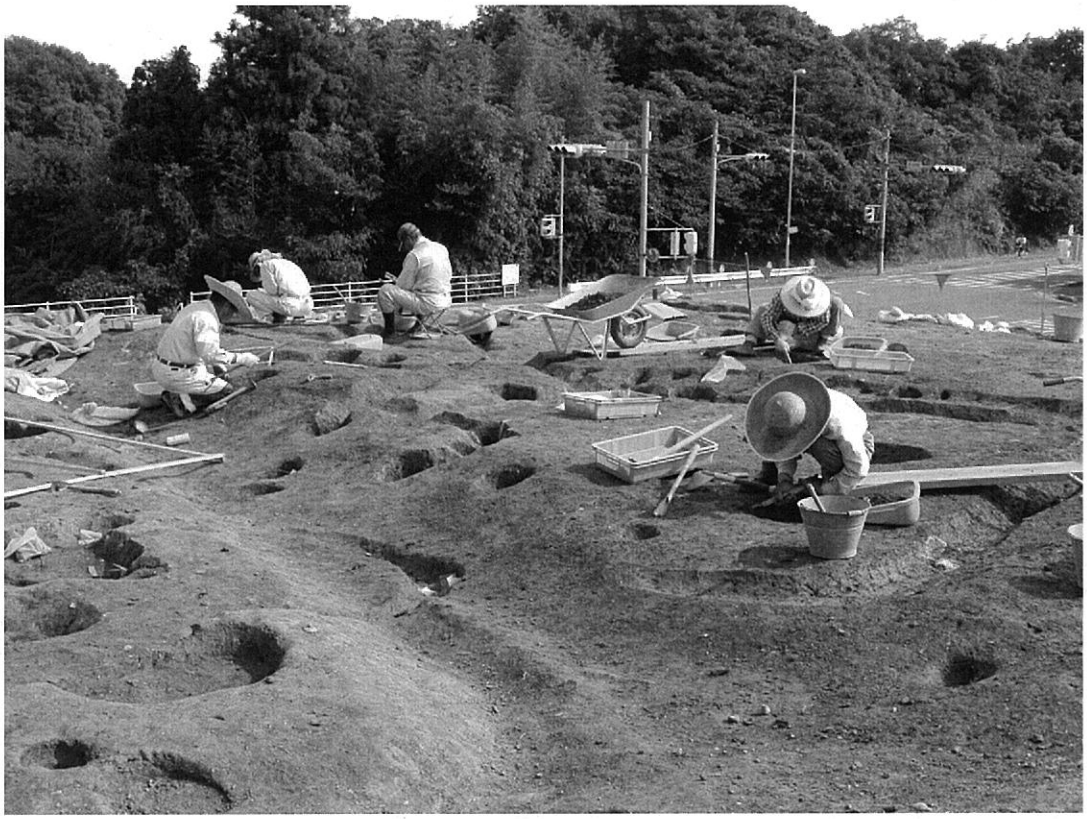
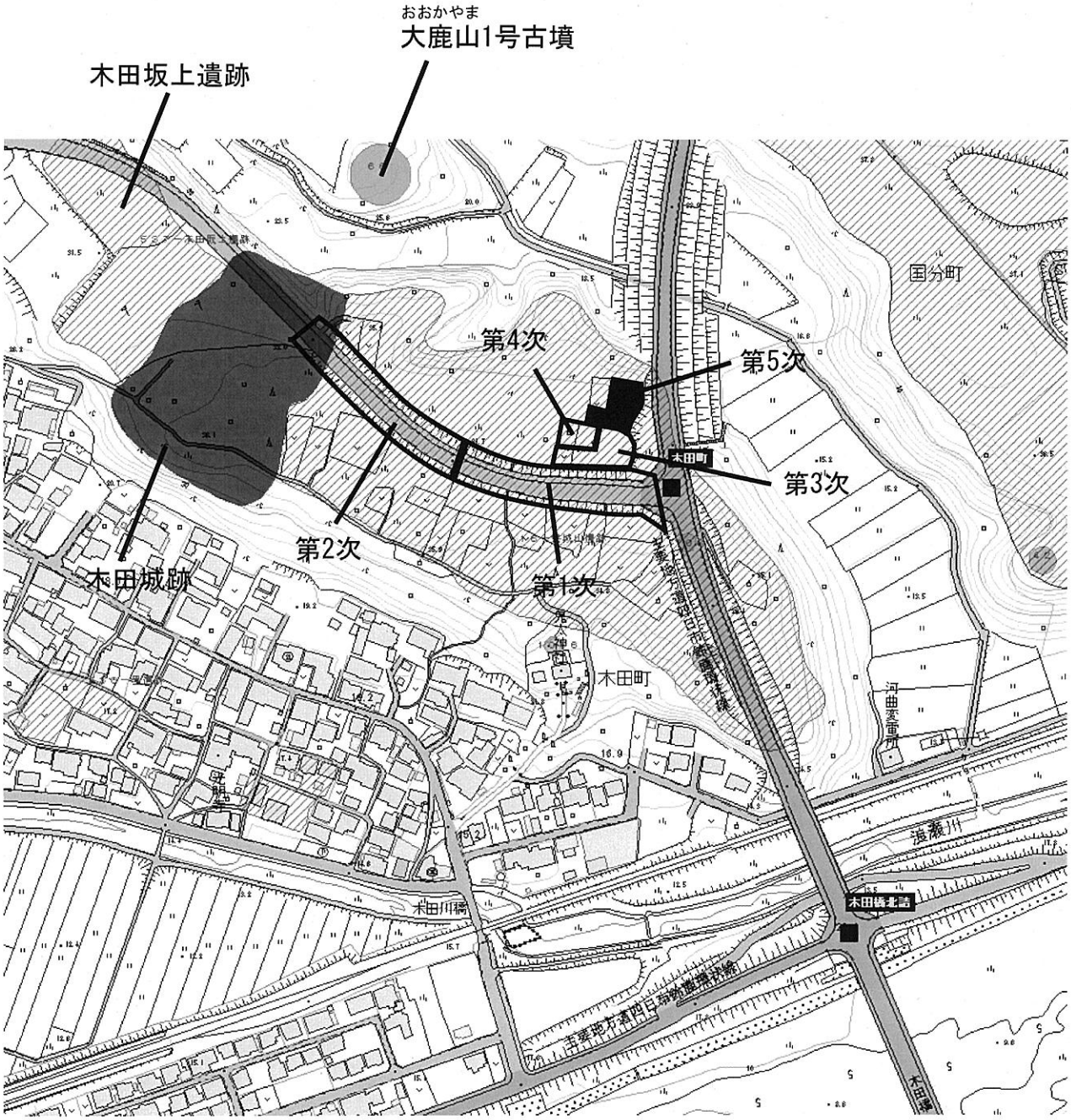


写真３　南区の掘削風景（北西から）

写真４　竪穴住居 60･66 の掘削風景（西から）

資料１



磐城山遺跡における発掘調査区（S=1/5,000）

資料2

磐城山遺跡における想定される遺構分布（S＝1/5,000）